令和5年 8月1日（毎月1日発行）　赤十字新聞　第999号　昭和24年9月30日　第三種郵便物認可

赤十字NEWS 8

AUGUST.2023.#999

Japanese Red Cross Society NEWS

トルコ・シリア地震から半年。

EARTHQUAKE

いち早く、ずっと支える日赤の支援

保健医療支援（こころのケア含む）
205万4395人を支援

救援物資
約631万4000個を配布

動員されたボランティア+職員数
35万795人が活動

トルコ・シリア地震DATA

地震規模 M7.8	犠牲者数 約6万人
余震 3万3000回以上	負傷者数 11万人以上

FUTURE

※7月20日時点のデータ

特集 ▶P. 2

最新リポート／トルコ・シリア地震から半年。国際赤十字と日赤の支援は今

CONTENTS

TOPICS

第49回 フローレンス・ナイチンゲール記章の受章者発表
国際的に活動する日赤看護師が受章

女性リーダー育成を目指す「GLOW Red(グローレッド)」
「本当に必要な支援」を女性視点で届けるために …… P. 4-5

連載

そのとき、日赤はどう動く！？
国内災害救護 まるわかり辞典 …… P. 4

輸血の歴史やトリビアが満載！
輸血なるほどヒストリー …… P. 5

AREA NEWS

［秋田］ 県内のフレイル予防推進を目指して「フレイル予防サポーター養成講座」開催

［千葉］ イラスト入り教材で考え、学ぶ 奉仕団がアフタースクールで防災教育

［茨城］ 水戸赤十字病院創立100周年の感謝と決意「これからも地域とともに」

／他 …… P. 6-7

WORLD NEWS

自主防災に取り組むネパール市民の熱意 …… P. 8

Present!!

ゆで太郎システム
ゆで太郎特撰水出しそば茶
（5袋入り×8パック）

プレゼント！
6名様
詳しくは P.7をCheck! ▶

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部 20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

SPECIAL FEATURE

特集 最新リポート

トルコ・シリア地震から半年。国際赤十字と日赤の支援は今

発災直後からトルコとシリアの赤新月社と国際赤十字、および日赤では、さまざまな支援を続けています。今回は、その活動状況と、現地の日赤職員のリポートを紹介します。

被害状況、そして被災地を襲う「酷暑」

2023年2月6日早朝、トルコ南東部のシリアとの国境付近でマグニチュード7.8の地震が発生し、その後もマグニチュード7クラスの余震が続きました。これまでに同地域で観測された余震は3万回を超えます。度重なる地震の影響により数十万の建物が損壊または全壊し、トルコ、シリア合わせて約6万人が死亡、さらに多くの人が負傷しました。

発災直後は氷点下にもなる厳しい寒さの中、被災者に対する早急な厳冬期対策が急がれましたが、発災から半年たった現在は45度近くにまでなる酷暑の中での本格的な夏を迎え、体調管理や熱中症予防が喫緊の課題となっています。

行き場を失う人々、経済制裁の影響

トルコでは、各種インフラ・サービスの復旧が急速に進んでいる一方で、多くの避難者の住宅供給が間に合わず、テントやコンテナハウスでの生活を余儀なくされています。シリアでは、発災当初から言われていたガレキ撤去のための重機の投入が進まず、放置された倒壊家屋が残っている状況です。住居が供給されないまま避難所の閉鎖が相次いだことで、行き場を失った避難者が地震の被害を受けたままの危険な自宅に戻ったり、仕方なく知人の所に転がり込まざるを得なかったりするケースが増えています。シリアでは経済制裁が続いており、避難者・一般生活者を問わず、生活の困窮や医療サービスの提供に大きな課題が残っています。

赤十字ネットワークの支援「よりよい復興」を目指して

被災地のトルコ赤新月社、シリア赤新月社は、発災直後から救命活動を展開しており、半年がたった今もなお、食料や水、住居、保健医療、こころのケアの提供など、被災した方々の命と健康、尊厳を守るため幅広い支援を続けています。日赤を含む国際赤十字のネットワークは両赤新月社の活動を支えるため、資金援助、救援物資や医薬品の提供などを行ってきました。現在、トルコでは復興に向けた住宅支援や被災者への現金給付などの取り組みに、また、シリアにおいては地震前から続いていた経済制裁下での人道支援の継続に議論の焦点が移りつつあり、いずれも中長期的な対応が必要です。

日赤も国際赤十字のネットワークの中で、今後は災害に対するコミュニティの能力を高める取り組みなども視野に、「よりよい復興」を目指して息の長い支援に取り組んでいきます。

全体

日赤の救援金受付金額
57億7083万5074円 ※6月21日時点（速報値）

日赤からトルコへの支援[*1]

IFRCを通じた資金援助
18億1000万円
（うち7億円は食料支援、7億円は現金給付支援へ使途指定）

保健医療支援
5億円

日赤からシリアへの支援[*1]

IFRCとICRCを通じた資金援助
7億1000万円

巡回診療など保健医療支援
2億円

トルコとシリアへの支援合計

35億8500万円
（7月13日時点。上記の他に医薬品などの支援を含む）

58億円規模の支援計画を策定し、順次実施中

*1 日赤の支援の中から一部抜粋。7月20日時点
※IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）、ICRC（赤十字国際委員会）。また、「赤新月社」はイスラム圏の赤十字社に使用されます

トルコへの救援車両支援
1億9100万円

この他に実施している支援の詳細、写真は日赤WEBサイトで！

シリア赤新月社の巡回診療を支援 ©SARC

全体

日赤の派遣者数
10人（連絡調整員4人、医療調査チーム3人、薬剤師2人、保健医療コーディネーター1人）

現地スタッフと話し合う髙原さん（右から2人目）

シリア・リポート　姫路赤十字病院看護副部長

髙原美貴さん

現地の支援に携わる支援団体の調整役も担う髙原さん（右）

ギリギリの状態の被災者心と生活を支えるために

5月末からシリアの首都・ダマスカスに入り活動しています。私の任務は、**国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の保健医療コーディネーター**として、シリア赤新月社（シリア赤）と共に、被災地での保健医療分野を指導・サポートすること。シリアは現在、赤十字だけでなく、WFP（国連世界食糧計画）など複数の国際組織が支援に関わっています。多くの組織が支援に携わることによる混乱を防ぎ、支援の重複やもれがないようにする、調整役も私の大事な役割です。

先日、シリアの今後の復興のための会議に参加しました。その会議には、被災した地域のシリア赤の5つの支部からも参加者があり、改めて被災地のリアルな現状を知ることができました。シリアは紛争による人道危機がとても長く続いているため、支援する側も疲弊し、また、経済制裁などもあって国外からの支援は年々減少。そんな中、今回の地震で、世界中からたくさんの支援が届いたのです。しかしそれも、数カ月たった今は少しずつ減ってきています。**先細りしていくであろう支援の中で、優先順位をつけ、本当に必要な人に支援を届けられるよう、調整していかなければいけません。**

現状としては、地震の影響で職を失う人も多く、生活支援の一環でボランティアにもわずかながら日当が支払われますが、経済制裁によって銀行からそのお金が引き出せないという事態も起こっています。健康面では、食習慣の影響もあり、糖尿病や高血圧などの生活習慣病の罹患（りかん）者が多いものの、薬が手に入らない状況が続いています。あらゆるニーズに対応すべく、現金給付をいかに実現できるかは一つの課題で、すでに一部では始まっていますが、被災した行政の混乱もあり、被災者に行き届いていないのが現状です。そして、私自身が保健医療コーディネーターとして、**忘れてはいけないと考えるのは「こころのケア」**。小さな揺れでも泣いてしまう子どもが多くいたり、被災者でもあるボランティアが取材中に泣き崩れてしまうこともありました。元々紛争の中にあり、**限界に近いところで保っていた精神状態が、もう持ちこたえられない**状況にあるというのが見て取れます。何をもってして「復興」と言えるのか、考え込んでしまうこともあります。シリア赤は市民にとても信頼されている団体で、シリア赤のボランティアは、国連などの大きな支援を最も必要な人に届ける役目も担っています。彼らは被災者でありながら誇りを持って活動しているのです。そんなボランティアたちの活動や赤十字・赤新月社の支援事業がスムーズに運ぶよう、コーディネーターとして努めていきます。

シリアのクリニックでスタッフたちと髙原さん（左）

Profile

たかはら・みき ● 姫路赤十字看護専門学校卒業後、1987年から同病院に看護師として勤務。1999年には、スーダン紛争犠牲者救援活動に携わり、その後もアフガニスタンなど12カ国で国際救援活動を経験する。2023年、フローレンス・ナイチンゲール記章を受章。（P.4で紹介）

TOPICS

1 TOPICS

第49回 フローレンス・ナイチンゲール記章の受章者発表

国際的に活動する日赤看護師が受章

看護活動の功績が讃えられる同記章の第49回受章者が発表され、22の国と地域から37人が受章。日本からは姫路赤十字病院の髙原美貴さん、東京医療保健大学の草間朋子さん、公益社団法人教育・ヘルスケア振興節英会の今村節子さんの3人が受章されました。

髙原美貴さん
（写真はバングラデシュ南部避難民救援事業で医療班リーダーを務めた際のもの）

5月12日、赤十字国際委員会（スイス・ジュネーブ）より、「第49回フローレンス・ナイチンゲール記章」の受章者が発表され、日赤から髙原美貴さんが受章。髙原さんは、1999年にスーダン紛争における犠牲者救援活動に携わって以来、11カ国で17回の国際救援活動を行ってきたことなど、長年の功績が認められました。髙原さんは現在、18回目となる国際救援活動として、2月の地震で大きな被害を受けたシリアに派遣されています。国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の保健医療コーディネーターとして、被災地のニーズを多方面から情報収集し、全体像を把握しながら、さまざまな国際機関との支援の調整役を担っています。国際的な活動の経験豊かな髙原さんですが、その根底には、日赤の看護専門学校時代から培われた理念があります。現地の人々の価値観や文化を尊重し、関わるそれぞれの人の視点に立つ姿勢。最良な支援の実現に向けて、粘り強く、押し付けない交渉を行う姿は、共に活動する人々にとって良い模範になってきました。今回の受章で、1920年の第1回授与からの受章者総数は1580人、そのうち日本からの受章者は115人で世界最多。7月下旬に開催される授与式の詳細は来月号にて紹介します。

「フローレンス・ナイチンゲール記章」とは？

近代看護の礎を築いたF・ナイチンゲールの功績になぞらえ、世界的に顕著な看護活動を行った人物に贈られる。2年に1回、赤十字国際委員会（ICRC）から受章者が発表され、日本の受章者には、日赤名誉総裁である皇后陛下から記章が授与される。

髙原さんの主な活動

［アフガニスタン紛争犠牲者救援］

2002年、アフガニスタンの紛争地で、現地のイスラム教徒の信仰心を大切にしながら、地雷により損傷を受けた遺体を「整体（損傷のひどい遺体を生前の姿にできるだけ似せて整復する方法）」して家族に引き渡すことを提案、現地職員と実践

［ヨルダン 中東地域紛争犠牲者支援事業］

2015年、紛争の影響で多くの避難民を抱えるヨルダンで、地域保健ボランティアの研修をし、現地の人々の病気の予防・早期発見につながる支援を実施。写真は避難民の子どもたちに絵を描く「こころのケア」を行っている様子

［バングラデシュ南部避難民支援］

2017年、ミャンマーからの避難民70万人以上が生活するバングラデシュ南部避難民キャンプに、国際赤十字の医療と衛生の緊急支援チーム（ERU）のリーダーとして着任。2018年には日赤の現地首席代表として再赴任した

そのとき、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するコーナー。

今回は**【避難生活を支える救援物資】**です。

災害発生時における被災地での日赤の救護活動として、医療救護班やこころのケア班の派遣などのほか、被災された方々への生活支援を行うことを目的に、救援物資の配布も行っています。体育館や公民館などの日常とは異なる状況である避難所などにおいて、少しでも過ごしやすい環境を整備するため、全社的な救援物資として**「毛布」**や**「緊急セット」「安眠セット」**を備蓄しています。災害発生時においては、行政職員やボランティアの方々の協力を得ながら、これらの救援物資を被災された方々へ迅速にお配りしています。

現在、全国に備蓄している救援物資の数量は、毛布が約34万枚、緊急セットが約11万セット、安眠セットが約6万セット（令和5年3月末時点）となっており、平時から各都道府県支部や各市区町村の倉庫などに分置して備蓄されているため、災害時でも迅速に搬送することが可能となっています。

また、上記の救援物資以外にも、地域性などに鑑み、各都道府県支部の判断により、ブルーシートや下着セット、タオルセットなどの救援物資も備蓄し、被災者の生活の質の向上に取り組んでいます。

緊急セットの内容

携帯ラジオ、電池、歯ブラシ、洗濯バサミ、タオル、救急絆創膏、鉛筆、メモ用紙、毛抜き、不織布マスク、災害時サポートガイドの冊子、懐中電灯、ポケットティッシュ、ビニール袋、弾力包帯、物干しロープ、スプーン・フォーク、軍手、ゴム手袋、ウェットティッシュ、不織布ガーゼ、コップ

「毛布」「安眠セット」の詳細は→

2
TOPICS

女性リーダー育成を目指す「GLOW Red（グローレッド）」
「本当に必要な支援」を女性視点で届けるために

2023年6月、国際赤十字・赤新月運動における女性リーダーの育成を目指すネットワーク**「GLOW Red」**の第4回年次会合がモンゴルにて開催され、日赤職員の五十嵐玲奈さんが参加。五十嵐さんはこの活動を次のように語りました。

「GLOW Redが始まったとき、女性の権利を主張するフェミニズムの団体かと勘違いされましたが、そうではありません。赤十字が支援する人々には、多様な人種や年齢、そしてジェンダー（社会的性別）があり、赤十字もそのダイバーシティ（多様性）に対応できる体制でなければ、適切な支援は難しいと考えています。社会的に立場の弱い女性や子どもを支援するには、女性のボランティアや、支援内容や方針を女性の立場に立って決定できる女性の管理者が必要です。日赤でも、赤十字奉仕団や個人ボランティアにおける男女比率は女性の割合が高く、さまざまな活動で多くの女性が活躍しています。また世界には、ボランティアから社長になり、無給の社長として支援活動を主導する女性リーダーもいます。彼女たちの、**「女性だからと気負わない」「ポジティブに支え合う」**というメッセージは、多様な人々の声に耳を傾けて、必要とされる支援を届け続ける赤十字の活動に欠かせないものだと感じています」

「GLOW Red」詳しくはコチラ →

同会合で発表する日赤職員の五十嵐さん

special message
～ボランティアから社長に～

グレナダ赤十字社で
初の女性社長を務めるサマンサさん
（GLOW Red会合での一場面）

Samantha Dickson
サマンサ・ディクソン
グレナダ赤十字社 社長（ボランティア）

教師をしていた1988年、赤十字の研修に参加したことをきっかけに、学校内でボランティアグループ（奉仕団）を立ち上げて、さまざまな活動をしました。グレナダ赤十字社が正式承認されたばかりのころで、国内にその輪を広めようと、地域奉仕団も結成。当時の教え子が今も赤十字に関わっている場面を見ると、自分のしたことが役に立っているとうれしくなります。

2018年にグレナダ赤十字社の選挙で社長に選ばれたとき、国の災害コーディネーターも務めていて、赤十字との協力の重要性を考えると使命だと感じました。GLOW Redの発足も2018年で、そこで志を同じくする人たちに出会えて、今も支えられています。

災害や紛争時に女性と子どもを始めとする脆弱な立場の人々へ適切な支援を届けるには女性ボランティアの存在が不可欠です。同時に、ただ女性を増やすのではなく、ダイバーシティの視点が重要です。

これからもリスクを恐れず「I can do it」の精神で、赤十字の7原則を大切にし、活動を続けていきたいです。

輸血の歴史やトリビアが満載！
輸血なるほどヒストリー
vol.2

監修 日本輸血・細胞治療学会名誉会員 髙本 滋 先生

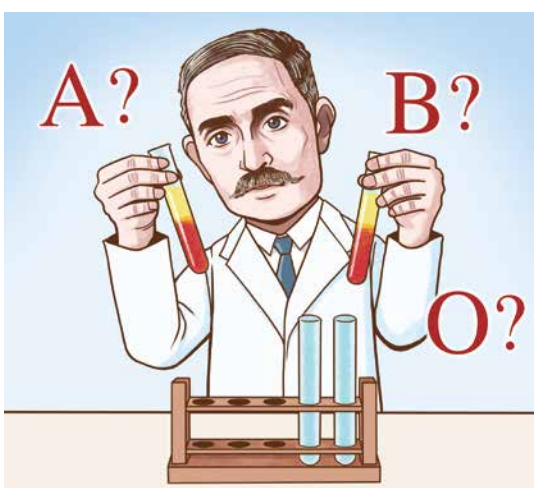
【輸血にまつわるさまざまなエピソードを紹介する連載コーナー。今回は、「ABO式の血液型の発見」について紹介していきます。】

輸血の歴史を変えたABO式血液型の発見
安全かつ安定した輸血方法の確立へ

輸血の歴史を語る上で大きな転換点となったのが、1900年のウィーン大学（オーストリア）の病理学者であったラントシュタイナーによるABO式の血液型の発見です。この研究によって、人には少なくとも三つの血液型があることが分かり、その1年後に白人には5%程度しかいないAB型の存在も判明しました。加えてもう一つの型であるRh式血液型は、1940年になってから発見されています。

ABO式の血液型の発見は、輸血の研究だけに留まらないとても大きな功績でしたが、発表当時は特に注目をされていませんでした。そして、最初の発見から10年ほどがたったとき、アメリカの研究者がラントシュタイナーの研究を踏まえて、これまでの輸血の死亡事故の原因に血液型の不適合があることを提唱し、世界に衝撃を与えることになります。当初、血液型の名称は各研究者によって独自につけられていましたが、1928年に国連がラントシュタイナーによるO、A、B、AB型への統一を宣言。1930年に同氏はノーベル生理学・医学賞を受賞するに至ります。

さらに、1914年ごろ、複数の研究グループからクエン酸ナトリウムが血液の凝固に作用することが報告され、輸血用の血液の抗凝固剤として利用できることが分かり、血液型の不適合を回避した安全な輸血と安定した血液の保存へ向けた研究が加速していくことになります。



ラントシュタイナーは血液を遠心分離で血漿と血球に分離させ、他人の血漿と血球を掛け合わせると凝集するものとしないものがあることから「型」があると発見した

AREA NEWS

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

千葉 イラスト入り教材で考え、学ぶ 奉仕団がアフタースクールで防災教育

6月7日、千葉市立大森小学校のアフタースクールにて、避難訓練と併せて防災教育が行われました。日赤の防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん！」を活用し、青年赤十字奉仕団と地域赤十字奉仕団の3人が学習指導とサポートを実施。想像力が刺激されるイラスト教材に、子どもたちからは「倒れてくるもの、動くもの、落ちてくるものに気をつけよう」「家に帰ったらおうちの人にも教えてあげたい」と活発な感想が聞かれました。指導員からは、「いわゆる“勉強”と違い、イラストを見て、考えながら防災を学ぶことができて、子どもたちも楽しそうに参加できた」との声が寄せられました。

秋田 県内のフレイル予防推進を目指して「フレイル予防サポーター養成講座」開催

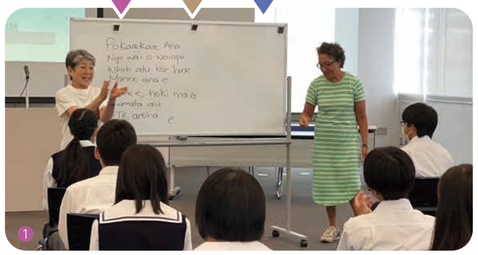
年齢とともに筋力や心身の活力が低下し、要介護となるリスクが高まる状態を「フレイル（虚弱）」と呼びます。日赤秋田県支部では、その予防を重要事業として推進しています。6月8日には、各地域でフレイル予防に取り組むリーダーを養成するために、「フレイル予防サポーター養成講座」を実施しました。当日は、県内各地から48人が参加。参加者からは、「少しの運動でしたが、心地よい汗もかいて、とても楽しい講座でした」などとうれしい感想が寄せられました。今後も、県内3カ所で開催を予定しています。

茨城 水戸赤十字病院 創立100周年の感謝と決意「これからも地域とともに」

6月14日に創立100周年を迎えた水戸赤十字病院。それに先立ち、6月10日には関係機関を招いての記念式典を開催。そして、創立記念日には、パネル展やバルーンアート、100周年記念仕様のラッピングバス出発式などのイベントを実施。ハートラちゃんもお祝いに駆けつけ、来院者には「ハートラちゃん紙うちわ」が配られるなど、院内は多くの人で賑わいました。同院は第二次世界大戦で建物を焼失しながらも診療を続け、東日本大震災では県内の被災者を受け入れつつ東北に救護班を派遣。地域と共に歩んだ100年を、映像でも紹介しています。

特設WEBサイトと記念映像はこちら

千葉 愛知 大分 多文化共生社会の実現に向けて 各地でさまざまな取り組み



多様な文化が共生する社会を目指して、日赤各支部では多種多様な取り組みがなされています。

千葉県支部（❶）では、6月16日に開催された「第1回千葉県青少年赤十字高校メンバー協議会」にて、『多様性の理解と尊重』をテーマに、地元語学奉仕団で通訳のボランティアをしている外国ルーツの方々と交流。来日のきっかけやボランティア活動への思いを語ってもらい、それぞれの国の遊びや歌の披露で理解を深めました。

愛知県支部（❷）では、さまざまな事情で児童生徒の健康診断がなされていない外国人学校における「健康診断支援事業」を実施。関係機関や地元企業からの協力を得ての身体測定のほか、日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院、名古屋第二病院から医師を派遣し、内科検診も行いました。

また、人口あたりの留学生が全国でも上位の大分県支部（❸）は、「国際理解×防災」をテーマに、留学生・大学生を対象として防災セミナーを実施。留学生4人を含めた計24人が参加し、日本語が母国語ではない方にも分かりやすい“やさしい日本語”を使った避難時の情報収集のやり方をグループワークで考えるなど、共に災害への備えを学びました。

「大雨災害義援金*」受け付け中!

＊義援金の募集については、被災都道府県の判断によるものであり、日本赤十字社はその判断に基づき、受け付けを実施しています。

日赤では6月末から7月にかけて、各地で大きな被害をもたらした大雨災害による義援金の受け付けを実施しています。**お寄せいただいた義援金は、全額を被災地の義援金配分委員会にお送りいたします。**皆様のご支援をお待ちしております。

※詳しくは日赤ホームページで「受け付け中の国内災害義援金」をご確認ください。

受け付け中

現在、受け付け中の「災害義援金」はこちら

【日赤の活動】日赤では発災直後から救護体制を整え、職員を県庁などの関係機関へ派遣し、情報収集を行うとともに、要請のあった行政へ速やかに救援物資を搬送しています。また、避難所の環境調査やボランティアの健康管理などを行うため、医療職の派遣も行っています。

〈⑥ 8月号読者アンケート〉質問項目

【A】 赤十字の活動の中でよく知っている事業はどれですか
ア. 国内災害救護 **イ.** 国際活動 **ウ.** 赤十字病院
エ. 看護師等の教育 **オ.** 献血（血液事業）
カ. 救急法等の講習 **キ.** 青少年赤十字
ク. 赤十字ボランティア **ケ.** 社会福祉
※上記選択から**ア～ケ**の文字をご記載ください。複数選択可

【B】 今回、赤十字NEWSを読んで、赤十字の活動の中で理解が深まったのは上記**ア～ケ**の事業のどれですか
※複数選択可

【C】 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま **イ.** A4サイズ
ウ. 小冊子（A5 148×210㎜）サイズ

【D】 現在の赤十字NEWSの読みやすさ
ア. 読みやすい **イ.** 読みにくい：その理由（文字量が多い/少ない、レイアウトが悪い、写真が多い/少ない、ページ数が多い/少ない）

【E】 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 **イ.** 2カ月に1回 **ウ.** 3カ月に1回
エ. 4カ月に1回

【F】 その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望

常任理事会開催報告

令和5年7月21日、令和5年度第4回の常任理事会が開催されました。
今回の常任理事会では、6月末からの大雨による災害にかかる日本赤十字社の対応等について、ポストコロナにおける赤十字病院グループのあり方についてそれぞれ報告しました。

神奈川・静岡 改めて学びたい水上安全法 海で、陸地で、講習会実施

多くのレジャーやイベントが再開した今夏。水の事故防止と発生時の備えのために、各地で講習会が開かれました。

日赤神奈川県支部（❶）では、6月7日から3日間、藤沢市の片瀬東浜海水浴場で水上安全法の講習を実施。指導員が、レスキューボードを使った救助や溺れた人を安全に陸へ運ぶ方法、手当ての仕方など、海水浴場ならではの実践的な救助法を伝えました。

また、静岡県支部（❷）では「着衣泳」と「水に入らないレスキュー」の講習を、県内38校の小・中学校で開催。「水に入らないレスキュー」では、プールなどの危険ポイントをクイズ形式で学んだ後、水中に見立てたブルーシートの上で、陸上から溺者を救助する方法を指導しました。受講した児童・生徒からは、「体験しながら学べたので楽しかったし勉強になった」などの感想が寄せられました。

京都 指導員ってどんなことしてるの？ 講習会の裏側を動画で紹介

日赤京都府支部の深田指導員（救急法・水上安全法）による、講習会PR動画の第5弾が公開されました。今回は指導員の目線で、会場の準備、受付から講習会の様子、終了後の振り返りまでを約9分にまとめて紹介。会社役員、警察官、学校の先生、主婦など、さまざまな職種のボランティアからなる指導員たちが、協力しあって講習会を運営する様子が収められています。この動画を通して、「指導員とは、人を助ける人を増やすことができるボランティア活動である」ということを多くの人に伝え、興味を持っていただけたらと思います。

動画はこちらから

Present!! 店舗の売り上げと連動して寄付をする基金を設立

パートナー企業 ゆで太郎システム

障害者福祉施設で製作されたクッキーを店頭で販売する取り組みを実施（一部の店舗）

「おいしいお蕎麦をできるだけ安く気軽に、皆様の健康に役立てれば」と、丁寧に挽いた蕎麦粉を使い、各店舗の製麺機で毎日製麺、打ちたて・ゆでたての蕎麦を提供している「ゆで太郎」。同社では、2016年から来店したお客様1人につき1円を日赤の活動資金として寄付する「ゆで太郎夢基金」の取り組みを続けています。この取り組みは日赤の防災の啓発活動、災害救護、社会福祉活動など幅広く生かされ、2018年には「第30回全国赤十字大会」において日赤名誉総裁の皇后陛下から直接、有功章を授与されました。コロナ禍で店舗の売り上げが著しく減少する中、「会社が存続する間は、最後まで社会貢献を続ける」という同社代表の強い意志のもと寄付を継続。また、障害者福祉施設で生産される商品を購入し、店舗でも販売したり、大きな災害時には店舗を休憩所として開放する想定をするなど、企業全体で多方面の社会貢献活動に力を入れています。

6名様 ゆで太郎特撰 水出しそば茶（5袋入り×8パック）

ティーバッグ1袋で1リットルのそば茶が作れます。「ゆで太郎オンラインショップ」でも好評販売中

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS8月号を手にされた場所（例／献血ルーム） ⑥8月号読者アンケートの回答（質問項目は右上の赤枠内）
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送／〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS8月号プレゼント係
WEB応募／右の2次元コードからご応募ください。
8月31日（木）必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS

―ワールドニュース―

ネパールってどんなところ？

北は世界最高峰のヒマラヤ山脈から、南はインド国境沿いの平野を有し、東西に細長く延びる国土から人種の幅が広い。国内には山岳地帯などインフラの整備が難しい地域が点在し、多くの住民がさまざまな災害リスクにさらされている。

自主防災に取り組むネパール市民の熱意

日赤では、2012年からネパールにおいて、災害リスクの高い地域での住民主体の防災・減災強化のサポートを続けてきました。今回は、その事業の一環として2021年から2023年にかけて実施している「コミュニティ防災強化事業」の現況についてリポートします。

インフラが不十分な環境で住民が主体的に防災に取り組む仕組み

ネパールには山や川が多く、地震や洪水、地滑りといった自然災害のリスクが高い地域が点在しています。2015年の大地震を含め、過去40年ほどの間に、災害による死者が4万人、負傷者が7万5000人、被災者は300万人に上るとされています。このようなリスクに備えるため、日赤はネパール赤十字社と連携し、さまざまな防災支援を続けてきました。

現在実施している**「コミュニティ防災強化事業」**は、公共サービスにアクセスしづらい地域や、災害時に弱い立場に置かれやすい人々へ向けて、**災害に強いコミュニティづくりを目指す**ものです。今年6月に現地の活動をモニタリングした日赤職員、遠藤立野さんは次のように話します。

「都市部から離れたへき地に住む人々は、災害時、迅速に支援をしてくれる存在として赤十字を認知している一方で、ひとたび災害が発生すれば、自分たちが住む地域は自分たちで何とかしなければという意識を持っています。赤十字は、自主防災組織の結成や研修、住民が地域の抱えるリスクの認知を深める防災学習や、緊急時には地元の行政と住民が連携して対応できる体制づくりをサポートしています」

自分たちが住む地域を守る意志 人を助けたいという意欲を持つ人々

2021年からは、ネパール西部3郡を対象に事業がスタートしました。コロナ禍の感染再拡大を受けて、事業は一時停止したものの昨年12月から再始動。この事業の要となるのが「自主防災組織」です。組織は、その村落で暮らす住民から構成され、防災活動や災害時の初動対応を中心になって担います。

「ピュータン郡の高校を会場に開催されたオリエンテーションには、教室に入りきれないほど多くの人が自発的に参加しました。スタッフの説明に熱心に耳を傾けている姿が印象に残っています」（遠藤さん）

その後、参加者間で話し合いが行われ、地域行政の1人を含む計11人による自主防災組織が結成されました。委員長に選ばれたチョトウさんは、「**災害時には、個人よりも組織で活動する方がたくさんの人の力になれる**と思う」と語り、主体的に防災に取り組む姿勢と共に、ボランティアとしての奉仕活動への意欲を見せてくれました。

住民同士で議論を交わし 自分事として防災に取り組む姿

自主防災組織による重要な活動の1つが、「VCA（Vulnerability and Capacity Assessment）」という、災害に対する地域の弱みと強みを「見える化」する取り組みです。ピュータン郡のある地区では、200人以上の住民が参加し、過去の土砂崩れの被害状況、各世帯の雨季と乾季の水と衛生状況などのデータを踏まえ、さまざまな議論が交わされました。VCAによって明らかになった地域の課題を共有することで、今後の防災計画の策定や資材の配備に役立てることができます。東ナワルパラシ郡で活動するメンバーは、「毎月1回ミーティングが開かれるので、地域の災害について話す機会が増えました。また、村の人々で資金を出し合い、雨季に氾濫する川沿いに土盛りの堤防をつくりました」と話します。これらの取り組みは、最終的に地元の住民と行政だけで防災体制が築けるようにしていくことが目的です。「**赤十字のサポートによって防災の知識と共にどのように備えるかのビジョンを持てるようになり、地域の団結と防災意識が高まっている**のを感じています」と遠藤さん。赤十字は引き続き、災害多発国ネパールで暮らす人々の防災への取り組みを後押ししていきます。

土砂崩れの発生した実際の山を見ながら、議論を交わす

自主防災組織メンバーが中心となり、地域住民が書き込みをして完成した災害リスクマップ

自主防災組織のメンバーとミーティングする遠藤さん（右）

遠藤 立野
（えんどう たつや）
国際部　開発協力課

日赤がネパール、アフガニスタンにて実施する中長期開発事業の事業管理を担当。現地とコミュニケーションをとりながら、“一過性とならない支援”の難しさとやりがいを感じている。